

## 『安達原秋二色樹』翻刻（下）

## 要 旨

前稿に引き続き、曲亭馬琴の合巻『安達原秋二色樹』（文政三年「一八二〇」）を翻刻紹介する。本作は、全体の筋を浄瑠璃『奥州安達原』に依拠しているが、なかでも四段目切に相当する「一つ家」を取り入れた場面では、髑髏に血を注いで親子関係を判断する〈吸着型〉の「血合わせ」が取り入れられている。馬琴はこれより以前、親子の血が混ざり合う〈融合型〉の血合わせを盛んに用いていたが、〈吸着型〉を中国の歴史文献から見出して以降は、こちらの方を優先的に利用するようになる。詳細は、拙稿「『血合わせ』再考―京伝・馬琴の諸作品をめぐって―」（『読本研究新集』13、二〇二二）を参照されたい。

キーワード…曲亭馬琴 合巻 演劇 血合わせ 一つ家



写真1 後編・原表紙  
(早大本)

「16才」

まへのつゞき 次の間より立ち出て、「いかに宗任、去りし頃、塩竈の社頭にて図らず汝を追ひ失ひし包季を見知りや。今宵此家に泊り合はせ、宵よりそれと知つたるゆゑ、討ち取らん易けれども、刀自女親子に仇討の志を果たさせん為、我はかしこに控へたり。逃れぬ天罰観念せよ」と、言はれて驚く宗任か、首をはつしと打ち落とせば、かねて合図を定めけん、所の庄官人夫らに乗物昇かせて出来たり。「御迎ひ」と呼ば、れば、包季は千代の戸を乗物にかき乗せさせ、かの錦木の名香と宗任が首携へて、刀自女にやがて暇乞ひ、見送る親に行く娘、「ずいぶん御無事で」



写真2 後編・見返し  
(早大本)

\* 中 尾 和 昇

「そなたも無事で本意を遂げや」、吉相を松の白雪吹き落とす、その  
 暁の風寒き、袂をこゝに分ちけり。○さる程に善知鳥二郎安方は、  
 かゝるべしとは神ならぬ身の白雪を犯しつゝ、只千代の戸の薬の代を  
 獲物もがなと狩り暮らし、その暁にけせのにて義家の放し給ひし鶴と  
 も知らで射て取りしが、後悔底に立たざれば、忠義の為に咎を思はず、  
 鶴の脚に付たりし、黄金の札を密かに取りて、帰る道にて女房う  
 きねが迎ひに出て、夜もすがら尋ね侘ひたるに行き合ひつゝ、夫婦打  
 ち連れて宿所に帰れば、刀自女はありし事の趣、初め終はりを告ぐる  
 にぞ。安方聞きてうち驚き、「この頃の人心、味方と見えても頼みか  
 たきに、姫上をたゞ一人包季にうち任せて、遙々国府へ赴かせ給ひし  
 は心許なし。いで追ひ付いで御供せん」と、身拵へして立出る門口に  
 は、次へつゝく



写真3 16オ

「16ウ17オ」

つゞき 所の役人洪坂柿平・南兵衛が訴人によりて、はや裏表をおつ

取り巻かせ、出んとしたる安方を、やりも過ぐさず大音上げ、「鶴を  
 殺せし大罪人、動くなやらぬ」とひしめいたり。安方門に立出れば、  
 待ち設けたる捕手の兵、組まんと寄るを突きのけ撥ねのけ、あるひは  
 引投げ腕取り、はらりと投げのけて、「千代の戸姫の御行方心許  
 なし。いざさらば御跡慕ひ奉らん」と言ひ捨て、駆け出すを、「ソレ  
 逃すな」と洪坂が、下知に従ふ組子ども、逸足出して追つかくれば、  
 跡に従ふ洪坂柿平・南兵衛もろとも走り行。夫の危難に立つ居つ、  
 心うきねが気も半乱。「こりやかうしてはゐられぬ」と抱へ引締め  
 逸散に、忠と貞との二筋道、見失はじと慕ひ行。○さる程に、  
 善知鳥二郎安方は追ひ来る追手を切抜けて、十町余り走りしが、その  
 身金石にあらざれば、すでに数箇所の手を負ふて、進退も心に任せず、  
 のつたる太刀を押し直し、流る、腕の血潮を吸ふて、一ト息ほつと吐  
 く折から、再び追ひ来る捕手の兵、「咎人を逃すな」と、皆声々に呼  
 ばはるにぞ。安方きつと見返りて、「今ははやこれまでなり。千代の  
 戸姫の御先途を見届け奉らざる事は、残り惜しき限りなれども、な  
 まじいに生け捕られなば、主の恥身の恥なり。腹を切らん」と座を占  
 めて、血刀逆手に取り直し、突き立てんとする所に、いつの程にか  
 いなむらかげ、窺ひ居たる狩人南兵衛、蝗のごとく飛んで出て、血刀を  
 踏み落とせば、驚きながら立上がり、「さては南兵衛、恨みは尽きじ。  
 冥途の道連れ観念せよ」と罵りあへず、よろめき組まんとする  
 をかい潜り、「ちよこざいすな」と横様にどうと蹴倒し踏みつけて、  
 からくと嘲笑ひ、「せつかく訴人した咎人、自害させては手柄が薄い。

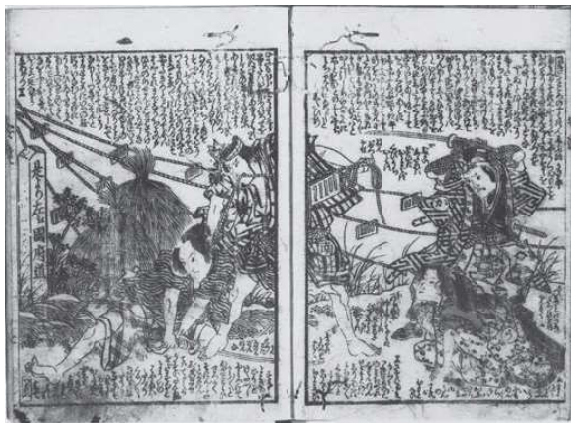


写真4 16ウ・17オ

短気を出すな」と用意の早縄、手繰りくるく投げかけて、高小手にぞ縛めける。かゝる所へ女房うきねは、こけつ転びつ走り来て、

つぎへ

か 自害したれば是非に及ばず。首打ち落とす、念仏申せ。

うへ 夫に先立つ此身の本望。迷はじと思ふ今にも、案じらるゝ

はお二人様。御運の末が心許ない。

南へ野締めにしては手柄にならぬ。じたばたせすと縄かゝれ。

安へ 深手に弱つてやみくと、虜になるか残念な。

是より左江国府道

「17ウ18オ」

つぎ「ヤア我が夫は手を負ふて、はや虜となり給ひしか。屠所の

羊となる夫を、見捨てていづこへ帰られう。恨めしの南兵衛、一ト

太刀なりとも夫の敵、やは安穩におくべきか」と、用意の懐剣引抜

きて、走り寄らんとする程に、後より馳せ来る洪坂柿平、「さうはさ

せぬ」とうきねが襟髪、かい掴んでたたと投げ据え、「女なれば用捨

して許しておけばつけ上がり、此所まで慕ひ来て、妨げをなす大胆

者。汝も夫と数珠繋ぎ。国府へ引く、覚悟をせよ」と睨みつけても

ちつとも騒がず、「とても惜しまぬ此身の命。縛めを受けんより潔く

自害して、夫の心を休めなん。こちの人、次郎殿、しばしは後れ先立

つとも、道は変はらぬ西方浄土。三途の川の川端で待つてゐます」

とばかりにて、涙玉なす氷の刃、喉へがばと突き立つれば、思はず

はつと見返る安方、胸は板屋を漏る月の、影より優き妹背の別れ、名

残情けも新身の刀、「いで介錯」と洪平が閃かす刃の下に、うきねが

首は落ちてけり。○これはさておき、藤太郎包季は千代の戸を伴ふ

て国府の城に立帰り、執権平太夫国妙につきて申けるは、「某しかゝ

ゝの過ちによつて、君の御勘気を蒙るといへども、けせの里におい

て藤原の時貞が後家ならびに娘千代の戸に対面し、その才覚によつ

て安部の宗任を討ち取り畢んぬ。そののみならず、失ひし錦木の名

香は、塩竈の社頭にて千代の戸に拾はれ、これさへ再び手に入たり。

かの時貞はかやうくの事により、先年安部の貞任に滅ぼされ、そ

の妻・娘は流浪して、今はけせの里にあり。此度の功によつて、本



領安堵の願ひあり。すなはち、かの千代の戸をも召し連れて候」と訴へ申たりければ、義家御感浅からず、「包季、先の不覚には似ず、

次へ

義へでかした包季、錦木の名香、宗任が首級、その家苞も千代の戸がみな功と聞くからは、時貞が本領をそのまゝ返し与ふべし。誰かある、銚子・盃を早く持て。

景へ君にも御不例やうやく御快気。よい折からの帰参でござる。

ちへ縁に繋がる私まで、ありがたい御目見得。此やうな喜ばしいめでたい事はござりませぬはいなア。

藤へ御勘気御赦免この身の大慶 景政殿、御前よろしくお取り成し、この上ながら頼み存ずる。

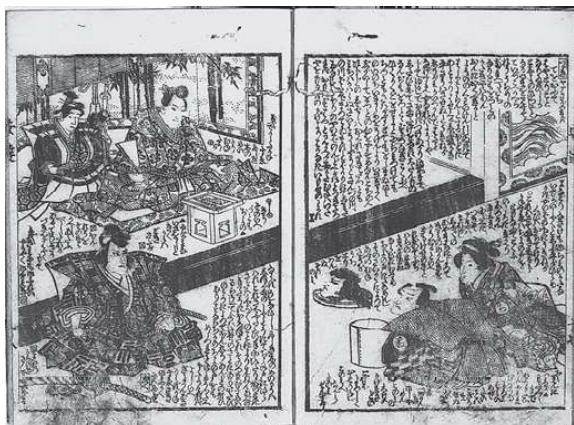


写真5 17ウ・18オ

「18ウ19オ」

つゞき 失ひし錦木をすみやかに尋ね出し、あまつさへ宗任を討ち取る事、莫大の働きなり。これしかしながら、時貞が後家・娘の忠節によれり。しからは、その千代の戸とやらんも、諸共に召し寄せよ。我対面して、その功を賞すべし」と仰出されしかば、包季喜んで千代の戸を伴ひ、すなはち出仕して錦木の名香を返上し、宗任が首を実検に入れ奉れば、義家朝臣は権五郎景政を従へて小書院に出給ひ、包季・千代の戸に対面して、その大功を褒めさせ給ひ、包季には勘気を許して手づから刀を給はり、又千代の戸には時貞の旧領を給はるべしと御約束あつて、まづ御盃を下されける。その時、千代の戸はいと面はゆげに膝を進めて、ほとり近く参るにぞ。義家土器を取り上げて、ひとつ干してさし給ふ。「折こそよけれ」と千代の戸は、義家の右の腕を丁と掴んで動かせず、氷のごとき短刀を懐中より抜き出し、「やをれ義家、よつく聞け。我はこれ藤原の時貞が娘千代の戸と仮の名、汝が為に滅ぼされし安部の貞任が（いつし）ちやぶ丸。俱不戴天の父の仇、いかで討たんと思ひしかば、母を助けて厨川の囲みを逃れ、我は女子の容に出立ち、母衣手は刀自女と名を変へ、時貞が妻子と偽りて年頃汝を狙ひしが、なほ疑はれん事を慮り、腹心の郎党さんの悪八郎為まさといふ者は、伯父宗任に似たるを幸ひ、彼を回国の修行者に立たせて上へ

下より 国中を巡らせしに、塩竈の社にて藤太郎包季が見咎めて、宗任也と思ひつ、搦め捕らんとしつる時、包季が取り落とせし錦木の





写真6 18ウ・19オ

名香を、我図らずも拾ひ取り、つひに名香を匿にして包季を誘き寄せ、苦肉の謀をもつて、不便ながら悪八郎為まさに切腹させ、その首と名香をもつて、うまく包季を謀りおふせ、相伴はれて国府に至り、汝に近づく事を得たり。刃を受けよ」と突、かくるを、義家騒ぐ気色なく、扇をもつて受け止め給へど、右の腕を取られしかは、**次へ**藤へめでたき君の御武運に、なほ敵たふは夏の虫。心改め降参せよ。義へ年を経て糸のもつれの物憂さに。ちへ衣のたてはほころびにけり。義家観念。景へさては女め、怪しき曲者、剣戟三昧、小癪なやつ。

「19ウ20オ」

つゞき逃れかたくぞ見え給ふ。景政・包季これを見て、「あなや」と驚き騒げども、なましに千代童を討ち取らんとする時は、主君に過ぎあらんかと心に危ぶみ、猶予して手に汗握るばかりなり。そのとき、義家はから／＼とうち笑ひ、「愚かなり千代童丸。汝が母もろとも姿を変へ名を改め、隠れ忍ぶを知つたれども、そのありか分明ならず。これによりて、藤太郎包季に謀を授けつゝ、しば／＼塩竈明神へ参らせしに、包季果たして宗任が絵姿に似たる修行者に出会ひ、又怪しき女子を見かけしかば、「これぞ千代童にもや」と思ひて、わざと錦木の名香を取り落として汝に拾はせ、曲者をさへとり逃がせり。これすなはち、かの名香を葉にして、汝らが隠れ家を探り知らん為なれども、我は包季が落度を責めて偽つて勘当し、しばらく彼を遠ざけしは、汝がありかを尋ねさせん為なり。されば我が謀る所に違はず、包季はかの名香によつて汝に近付き、偽宗任が首を受け取りて、こへ伴ひ来りしは、汝を誅せん為と知らずや。かの貞任は朝敵なり。その子として義家を仇とする事、天理に背けり。降参せよ」と責め給へば、千代童怒れる毗を逆立て、「謀る／＼と思ひしに、さては汝に謀られしか。よしさもあらばあれ、籠中の鳥いかでこの手を空しうせん。父を討たれし無念の涙、雨となりまた雪となり、積もる恨みは年を経て」と言ひつゝ、再び討たんとするを、義家馬手に受け流し、「糸の乱れのものぐさに」と七五を継いで振り払ひ、七尺の屏風を越えて後ろざまに飛び去り給へば、義家の右の袖はさらりと裂けて、取ら

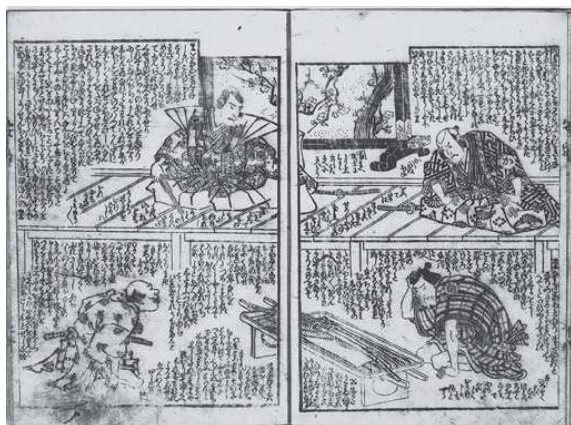


写真7 19ウ・20オ

れしまゝに千代童丸が手に残り、主は遙かに逃れ給ふ。千代童無念の齒噛みして、「衣のたてはほころびにけり。汚し返せ」と呼び掛け、追はんとすれば、景政・包季左右より懸け隔て、「推参なり千代童丸。我が君鬼神不測の武略に乗せられながら、なほ狂ふや。縄をか、れ」と詰め寄すれば、「ものゝしや」と割つて入り、表を指して馳せ出れば、「あれ打ち止めよ」と、兩人が下知に従ふ兵ら、こゝかしこより現れ出、「我打ち止めん」とおつ取り巻き、揉みに揉んで責めたりける。○かくて四五日を経て、けせの郡官渋谷柿平は善知鳥安方を引かせ、狩人南兵衛を伴ひて国府に参上し、「藤原の時貞もとの家臣善知鳥二郎安方と申者、掟を破り鶴を殺して黄金の札を盗

み取つたるを、狩人南兵衛訴へしかば、多勢をもつて搦め捕らんとせしに、安方囲みを切り抜けて逃れ去りしを、南兵衛が生け捕つて候なり。しかるに、安方が主と頼む時貞が後家・娘は、世を忍ぶまでの偽り事にて、まことは貞任が妻衣手、その子千代童丸なる由、途中にて風聞に伝へ聞き、件の衣手をも搦め捕らんと思ひ候て、道よりとつて返したれども、はや逃げ失せて行方知れず。これによりて、時節延引に及び候。次へ

かへ犬骨折つて鷹に取らるゝよい奉公とは拙者が事。南兵衛殿、羨ましく存じます。

へ南兵衛、武士に取り立らるゝ。詳しくは末に見へたり。

国へ先立つてそのもとに仰付られし善知鳥の鳥はいまだ手に入らねども、善知鳥次郎を生け捕りしは、それにも勝る功名く。

南へ一足飛びなる此身の大役、御恩余つてありがた迷惑。お受け申すも何とやら。

## 「20ウ」

つゞき かつ又、安方が妻うきねと申者は自害して候へば、首取つて見参に入候」とぞ申ける。執権平太夫国妙、事の由を聞き届けて、まづ安方をば厳しく獄に繋がせ、その後、狩人南兵衛を呼び出し、「汝諸人に先立ちて貞任が余類、善知鳥安方を生け捕りしは拔群の大功なり。又かの安方が主と頼む千代の戸は、貞任が一子千代童なり。彼すでにかやうくの事により、此所へ来たるといへども、つひに

多勢を切り抜けて、逃げ去つて行方知れず。千代童親子がありかを尋ね、搦め捕つて奉らん者、南兵衛が他にあるべからず。これにより、今日より武士に御取り立てなさる。安方が詮義ならびに千代童親子がありかを尋ねよ、との厳命也」と説き示して、広蓋に積み並べたる大小衣服を渡すにぞ。南兵衛大きに迷惑して、しきりに辞退するといへども、つひに逃る、道なければ、衣服を改め、義家朝臣の見参に入りしかば、すなはちかり戸南兵衛と召され、「国妙と諸共に安方を問ひ落とし、千代童・衣手が行方を詮索すべし」と仰付けられしかば、これより日毎に安方を引出させて、厳しく詮義したりける。

国へ黄金の札を取つたるも軍用の為ならん。白状して苦痛を逃れよ。

南へしぶとい奴め、言はぬとて言はずにおかふか。水責・火責やからわり、骨を拉いで白状させるぞ。

安へ身は八つ裂きになるとても、千代童丸の行方はもちろん、衣手殿の事までも、知らぬく知りませぬぞ。



写真 8 20 ウ

「21オ」

さる程に、平太夫国妙・かり戸南兵衛は義家朝臣の仰によつて、安部の貞任が余類善知鳥次郎安方を呵責して、貞任か一子千代童丸ならびにその母刀自女が行方を詮索するといへども、安方つひに白状の気色なく、いたづらにぞ日を送りける。これによりて、安方をはしばらく南兵衛に預け置かれるが、義家重ねて仰けるは、「安方は朝敵の残党なれども、敵の為には忠義拔群なる者也。彼一人を許すとも何事をかし出すべき。すなはち赦免せしむる。錠放ち遣はすべし」と下知し給ひしかば、南兵衛受け給はり、「御誕では候へども、安方は千代童親子が股肱腹心の者なり。それを助けられん事、後の災ひ計りがたし。よく賢慮を巡らされしかるべし」と諫め申せしかど、義家は南兵衛が諫言を用ひ給はねば、力及ばずして安方を引出させ、厳命の趣を申渡して、腰刀を返し遣はし、「とくく罷り出べし」とて追つ立てけり。かくて僕らも皆退きて、あたりに人のなかりしかば、安方は切戸口より取つて返し、南兵衛にうち向かひ、「御計略大方整ひ、敵義家に近付きつぎへ

南へ大死するはその身の勝手。聞く耳持たぬ。何ヲ馬鹿な。

安へ義家殿を仇として恨み給は、これ朝敵。諫めて死するは忠義の本意。御心を改め給へ。チエ、お情けない宗任様。



## 「21ウ22オ」

「つゞき 給へば御本望なるべし」と言ふ。「声高し」と南兵衛は押し止めてあたりを見回し、「父兄の恨みを返さん為、兄嫁衣手の刀自、甥の千代童らと心を合はせてさまぐに手立てをめぐらし、きんの悪八郎為まさを宗任と名乗らせて、今又汝ら夫婦まで、妻は刃に身を殺し、夫は獄に繋がれて、呵責の苦しみ思ひやる。しかるに、千代童親子が謀忽ちに顕れて、為まさが忠義の落命、いたづら事になりたれども、二の目を持つたる宗任が計略には、義家も欺かれて心を許し、側近く使はるれば、折を見合はせ刺し殺し、父兄の仇を報はん事、掌の内にあり。汝は密かに六郡を徘徊して、遠近に忍びをる味方にこれらの由を告げよ」と言へば、安方つくぐと顔を見上げて目を瞬き、「情けなや宗任様。の給ふ所孝に似たれど、己を知つて敵を知らずは、なほ蟬螂が斧をもて車に向かふに等しからん。義家は古今の名将、武略に長けて智恵深し。御身をば、はや宗任と知らずして取り立てんや。又某を許せしも、心あつてのわざならん。及ばぬ



写真9 21オ

謀反に身を殺し朝敵と言はれんより、早く御心を改めて、かの人に降参し、絶えたる家を興し給へ。かく言へばとて、安方が敵に一心あるにあらず。とくより此義を存する故に、衣手様、千代童様をしばく諫め申せしかど、つひに聞き入れ給はねば力及はず、危ぶみながらその意に任せ奉りしに、果たして毛を吹き傷を求めて、詮索すでに嚴重なり。つひには尋ね出されて、縄目の恥にあひ給はゞ、後悔そこ立ちがたし。女房うきねが自害せしも、まことは主君を諫めかねし安方が心に同じ。妻もさこそは待ちわびなん。長らへてなか

## 次へ

く後の嘆きを増さんより、  
国へスリヤ洪坂柿平は安方を刺し殺し、あまつさへ貴殿を打たんとせし故、止む事を得ず手に掛けしとな。ハテ物好きなる柿平



写真10 21ウ・22オ

が最期の趣言上せん。南兵衛殿サ、ござれ。  
南へ功を嫉んで非道をおこなふ曲者なれば、是非に及ばず。討ち果  
たしたる刀の役目、よろしく披露頼み存ずる。

「22ウ23オ」

潔く腹かき切りて、二心なき安方が君安穩を守るべし。南無阿弥陀  
仏」と唱へも果てず、刃をひらりと引抜いて、腹一文字にかき切たり。  
宗任はつと驚きながら、思ひ返して嘲笑ひ、「臆病者の狂ひ死には、  
敵に損なく味方に益なし。これまでの好み甲斐に、いで介錯して取  
らせん」と、刀をきらりと引抜きて、首をはつしと打落とせば、様子  
を窺ふ渋谷柿平、小柴垣より現れ出、「様子は残らず立聞きせり。い  
で注進」と駆け出すを否諾もやらず、南兵衛が浴びせ掛けたる後ろ袈  
裟、刃の光諸共に、一二つになつて倒れけり。折しもその日は黄昏時、  
平太夫国妙は、「あな物騒がし、何事ぞ」と手燭携へ庭先へ出ても  
騒がず。南兵衛は血刀拭ふて鞘に納め、「御赦免の安方を放ち遣は  
し候ひしに、渋谷柿平遺恨を含みをり、戸の陰に待ち伏せして安方  
を刺し殺し、あまつさへ某をも打ち果たさんとしつるにより、止む  
事を得ずかくの如し」と言ふに、国妙苦笑ひして、「しからば事の  
趣をいざ言上」と先に立、伴ひ奥に入にけり。○こゝに又、安部の  
貞任が妻衣手の刀自は、謀顕れて、千代童は国府にて搦め捕  
られしとも、又逃げ失せしとも聞こえし頃、早くけせの里を逐電して  
遠近に立ち忍びしが、つひに宮城野の原に留まりて、野伏の姿にや

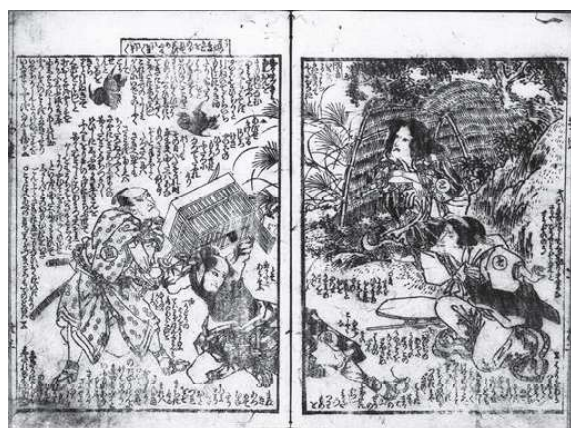


写真 11 22 ウ・23 オ

つし、味方の兵を招き集めて、宗任・千代童らが訪れをぞ待ちにける。  
それはさておき、奥州鎮守府の住人に僉丈兵衛直方といふ者あり。  
もとは貞任が雑掌なりしが、貞任謀反の刻、頻りに諫言したれども、

つぎへ

そへ父様、怪我して下さりまするな。コリヤどうせうぞ、何とせ  
うぞいのう。

ほへ御下知のあつた善知鳥の鳥、この街道をうかとは通さぬ。刃  
物三昧、何ヲ小癪な。

直へ善知鳥の鳥を失ふては、我が念願も水の泡。首を並べる覚悟  
しろ。

○貞任が余類蛭巻鉾藏、衣手の刀自と心を合はせ、善知鳥の鳥を奪はんとて直方と争ふ。

善知鳥の鳥、籠を逃れて飛び巡る。

へトヒヨく

へトヒヨく

〔23ウ24オ〕

つゞき用ひられざれば、身退きて頼義朝臣に従ひ奉り、戦場に臨みて無二の忠節をあらはせしかば、貞任滅びて後、直方をば義家朝臣に付けられて、形の如く召し使はるゝ程に、直方に一人の娘ありて、その名を袖萩といへり。器量はさらなり、心ばへ優しき者なれば、仲立ちありて、袖萩を藤太郎包季に妻合はせしに、いかなる故ともなく、包季は袖萩を離別してけり。これさへ不審の事なるに、直方又義家の不興を蒙り、忽ち所領を召し放されて、鎮守府へ追ひ返されけり。この時、袖萩は懷妊して、はや三四ヶ月になりけるが、思ひがけなく夫に去られて、父は又浪人し、親子諸共に鎮守府にさすらひて、袖萩は包季を恋ひ慕ふ袖の涙川、長らふる身をかこちつゝ、両眼を泣き潰して、生まれもつかぬ盲となりぬ。直方これにいよく嘆きて、「我に罪なく娘に咎なし。しかるに我は所領に離れ、袖萩は離別せられて、親子憂ひに沈む事、人の讒言によるものならん。所詮一つの功を立て、勘気の詫びをせばや」と思ふに、義家年頃じやくの為に外の浜なる善知鳥の鳥を求め給へども、なほこれを得給はず。

「我いかにもして善知鳥の鳥を捕りて、義家朝臣に奉らば、もとの如く召し使はれん。しかる時は、包季も又、袖萩を呼び返さん。親子帰参の家苞は、善知鳥に増すものあるべからず」と漸くに思案を定めて、一人遙々と外の浜に赴き、所の獵師を語らひつゝ、千辛万苦して、つひにかの鳥一ト番ひを生きながら捕らへしかば、直方喜びに堪へず、急ぎ鎮守府に立ち返りて、事の由を袖萩に告げ知らせ、さらに旅立ちの用意して袖萩を伴ひ、鳥籠を背負ひもしあるひは馬にも付けさせて、国府へ赴く程に、宮城野のこなたまで来にけり。こゝより府中へは遠からねど、袖萩は盲の事なるに、腹に八月の子さへあり、長途に疲れ果てしかば、直方一挺の旅駕籠を雇ひて、これに袖萩を乗せ、鳥籠をばその上に括り付けさせて、行く事一里ばかりにして、宮城野の原を過るに、

つぎへつゞく

へ儼丈直方、鉾藏を相討ちして最期。

とへその胎内の子の血を搾り、善知鳥の鳥の血潮に合はせて、姿を変ゆる我が身の妙薬。空を飛ぶ鳥も手練の手の内。狙ひ違はずまつこの通り。

そへナウ恐ろしい。お腹のやゝまで薬の代にしようとは、鬼にも勝つた大悪邪見。何の因果で此やうな、憂き目には遭ふ事ぞいのう。



「24ウ25オ」

つゞき 此日、袖萩を乗せたる駕籠昇きは、蛭巻村の鉾蔵と呼ばれて、所に名高き曲者なれば、相棒の槍八に、はや毒気を吹き込みて、野中に駕籠を昇き下ろし、酒手を強請る事、大方ならず。直方、憤りを堪え忍びて錢を増し、言葉をやわやわに宥めしかども、もとより巧みし事なれば、鉾蔵らは得心せず、是非なく喧嘩を仕掛くるにぞ。直方も引くに引かれず、まづ袖萩をばあたりなる野伏の小屋の陰に退かせ、「すはと言はゞ切り捨てん」と、刀の鯉口寛ぐる、刃物に恐れぬ不敵者、「ソレ打ち倒せ」と鉾蔵が声諸共に、息杖を両方より閃かし、打つを左右へ引外し、しばらく挑み戦ひしが、鎗八が息杖を斜にはつしと切落とし、返す刀に肩先より乳の下かけてはたと切



写真 12 23 ウ・24 オ

る。切られて「あつ」と叫びもあへず、どうと倒れて息絶へたり。その隙に鉾蔵は、駕籠に付けたる鳥籠を手早く解きて腋挟み、「これさへ奪へば駄賃になる。そこにござれ」と駆け出す。直方「あはや」と飛び掛かつて、後ろさま引戻せば、たどるぎながら身をひねり、なほ渡さじと逃げ回るを、追っかけ追ひつめ付け回し、真向微塵と打つ太刀を、「さしつたり」と鉾蔵が、  
 下の方へ

上 籠もて丁と受け止むれば、忽ち籠の口開いて、内より飛び去る二羽の鳥、遠くも去らず飛び巡る。小屋の内には衣手が瞬きもせずうち眺め、「伝へ聞く善知鳥の鳥は、物を憐れむ心深く、下に戦ふ人あれば、相悲しんで遠く去らずと、人は言へども見るは初めて。ムウ」と心に一ト思案。こなたの二人は一生懸命、なほ尽きあへぬ息杖に、刃もさゝらの滅多打ち。直方つひに踏み込んで、鉾蔵を切り倒し、止め刺さんとする程に、相手も強か者なれば、下よりして直方が脇差の柄を握り、ひらりと引抜きぐさど刺す。刺されながら直方は、つひに止めを刺したれども、急所の痛手にしばしも得堪へず、重なり伏して死んでけり。袖萩は太刀音を聞きには聞けど目に見えぬ。「父様危ない」と、胸を冷やして立ち居つ、父の最期を目の当たり、見るより悲しき目なし鳥、空にも鳥の声交はし、誰が為に鳴く血の涙、われも雨とぞ降り注ぐ、袖片敷しきてむせ返り、絶ゆるばかりに嘆きけり。「さもこそあらん」と、衣手の刀自女は小屋より立出て、「ナウ女中、思ひがけなき旅路の災難。見れば身重であるそうな。わしはこゝらにをる者じや。愛しやの親は討たれて目は見えず。生きて

苦勞くろうをしようより、死ぬるがいつそましである。  
 へこりやしかも男の子。何はともあれ此血潮ちしほ、見咎とがめられぬその内うちに、ドリヤ調合てふがふにかゝらふか。

次へ



写真 13 24 ウ・25 オ

「つゞきどりやく／＼殺ころしてしんじやう」と、言いひつ、襟髪えりかみかい掴つかみ、膝ひざへぐつと引寄よすれば、袖萩そではぎはつと驚おどろきながら、取とられし髻たづみに手てをかけて、「さてはそなたも悪者わるものの同類どうるいであつたよな」と、言いはせもあへず嘲笑あざわらひ、「悪者わるものやら良い者よものやら、仲間なかまといふ者はなけれど、さしあ

又あの善知鳥うとうの血潮ちしほを取とつて、合あはしてこれを飲のむ時は、黒髪くろかみ変へんじて白髪しろがとなると、かねて聞きこたる事ことあれば、故ゆゑあつて、世よを忍しのぶわしが姿すがたを変かへん為ため、抱よん所ところなく命いのちの無む心しん。痛いたうは殺ころさぬ、死しんでたも」と、言いはれてます／＼驚おどろく袖萩そではぎ、流ながる、涙なみだをおし拭ぬぐひ、「夫そに去さられ親おやを失うしなひ、泣なき腫はらしたる目は潰つぶれ、世よにたつきなき此身このみの不幸ふかう。命いのちはさら／＼惜をしまねど、日の目めも見みせず腹はらなる子こまで、薬くすりの代しろにくれろとは、あんまりむごい鬼おにが邪まじや、せめて此子このこを産うみ落おとすまで許ゆるしてたべ」と、漸やうやくに引離はなちて逃にげんとするも、裾すそを払はらつて引倒たふし、起おこしも立てず胸先むなさきへ、ぐつと突つき込む氷こほりの刃やいば、玉切ぎる声こゑを隣あはれみてや、再び間近またまぢかく飛とび下さがる、善知鳥うとうを刀自女とちめはきつと見て、弓手ゆんでに抜き取る袖萩そではぎが、笄かうがひ・簪かんざし早速さそくの手裏剣しゅりけん、続つづけさまにはつしと打うてば、狙ねらひ違たがはず二羽ふたはの鳥とり、地上ちじやうにはたと落おちてけり。かくて衣手ころもでの刀自女とちめは、袖萩そではぎが腹はらを裂さきて胎内たいないの子この血潮ちしほを取り、又雌雄しいうの善知鳥うとうの血ちを搾しぼり、面桶めんづに受け合あはして、只一ト息いきにぐつと飲のみ干ほし、用意よういの壺つぼを取とり出して、再び善知鳥うとうの血ちを蓄たくはへ、片方かたへの池いけに立たち寄よりて、我が影かげ映うつす水鏡かみ、見る／＼黒髪くろかみ忽たちちに変へんじて、雪ゆきを頂いたく白髪はつの姥うばと見紛まがふ面影おもかげに、「奇きなり／＼」と嘆賞たんせうし、「かくまで姿変すがたかはりしかば、よも見咎とがむる者ものあらじ。これよりして安達あだちが原はらなる黒塚くろづかに住家すみかを求め、此善知鳥うとうの血潮ちしほを囿をとりに義家よしへに近付ちかづきて、

次へつゞく

## 「26才」

つゞき 恨みを返さん、喜ばしや」と笑む口元は耳まで裂けて、瞳  
 輝く鬼畜の悪相、安達が原の黒塚に、鬼籠るとはこれならん。はや  
 日は暮れて人気なき、野面に壺を引抱へ、悠々として行く程に、先よ  
 り木蔭に様子を窺ふ、編笠の武士兩人つか／＼と立出て、行くを止む  
 る右左、こなたへ引けばあなたより、付け回したる先手後手、打て  
 ば払ひ払へば沈む星影に、跡を暗ます草隠れ、刀自女は見えずなりに  
 けり。かくて衣手の刀自女は、かの妙薬をもつて面影を變じ、安達  
 が原の黒塚なる一つ家に移り住みけるが、その気色のいと恐ろしげな



写真 15 26 才



写真 14 25 ウ

るにより、世の人、黒塚の鬼刀自とぞ呼びなしける。しかるに、味  
 方の残党蛭巻・石突槍八らは、直方と相討ちして死たる後、い  
 まださせる兵もあらず。只善知鳥次郎安方とその妻うきねのみ、夜  
 なく忍び来て刀自女に諫言し、「某ら久しく国府に捕はれしに、義  
 家の仁心によつて許されたり。今の世にして、かの人を滅ぼさん事は  
 道理に背けり。とかくに御心を改めて、義家朝臣に従ひ給へ」とか  
 き口説きつゝ、諫めければ、刀自女はうち腹立ちて、いたく叱り退くれ  
 共、その次の夜も又来りて、諫むる事初めのごとし。刀自女はいよ／  
 怒り猛りて、安方・うきねを追ひ出し、唐の戸を閉させとも、いづ  
 ちより入るとは知らず、夜毎に来ては諫めけり。

とへ又失せたか卑怯者。言ふ事聞かぬぞ、立ち去れく。

へ今宵も又参りました。安方でござります。ハイうきねでござりま  
 す。かねく申上ぐる事、お聞き入れ下さりませ。

## 「26ウ27才」

しかるにある日、野装束せし武士兩人、網乗物を昇かせつゝ、この  
 一つ家に入り来りて、組子に刀自女をおつ取り巻かせ、「やをれ、黒  
 塚の鬼刀自とは汝なるべし。いぬる頃、安部の貞任が一子千代童丸、  
 女の姿に出立ちて国府の城に推参し、義家公を討ち奉らんとしつれ  
 ども、事顕れて虜となりぬ。しかれども、千代童は逃に去つたりと  
 披露せられて、同類の者を詮索せられしに、黒塚の鬼刀自こそ千代  
 童丸が母にして衣手の刀自なりと、確かに注進せし者あり。又我か



君久しく求め給ひし善知鳥の鳥の血潮を取り、汝が家に蓄へ置く事分明なり、と告ぐる者あり。これ御不審の第一なり。これによりて、千代童を此所へ引かせ来て、その面影を見比べて聊かも似たらんには、これ親子の証拠なり。しからずは、何によりてかの鳥の血を隠し置きたる。すみやかに白状せば罪一等を宥められん。かく言ふは、かり戸南兵衛・藤太郎包季なり。厳命によつてかくの如し」と言ふに、刀自女はちつとも騒がず、「こは思ひがけもなき衣手とやらん千代童とやらん、身にとつて覚えはあらず。又かの善知鳥の血潮の事は、故あつて相伝せり。大切の品なれば、御使ひには渡しがたし。義家公の見参に入る事あらば」と言はせも果てず、南兵衛声を荒らげて、「推参也、老いぼれめ。義家公は鎮守府の將軍也。汝らごとき賤しき者を、呼び近付け給はんや。物な言はせそ。縛めよ」と下知に従ふ兵ら、「捕つた」とかゝるを左右へ外して、どつさり引投げ手練の柔に、進みかねてどよめけば、南兵衛苛つて鯉口寛げ、走りかゝらんとする所に、表の方に声高く、「ヤア／＼南兵衛聊爾せられな。我が君渡らせ給ひぬ」と、音なふ声に人々は「思ひかけず」と恭しく、立ち出迎へ奉れば、義家朝臣は鎌倉の景政らを御供にて、悠々と座に着き給ひ、「安達か原の冬景色、我も又見まほしく、思ひ立つたる鷹狩のついでをもつて、この家の主鬼刀自とやらんに對面し、尋ね問ふべき事もあれば、自らこゝに立ち寄つたり。ソレ／＼包季、咎人を引出し、刀自に見せよ」と御錠に従ひ、網乗物より引出して、貞任が一子千代童丸、身は赤縄に縛められ、久しく獄に繋がれし、

呵責に屈せぬ面魂、縁先狭しとどつかと座す。義家遙かに御覽じて、「いかに鬼刀自、あれを見よ。世の風聞を仄かに聞くに、そちは彼が母にして貞任が妻衣手なるが、薬を服して姿を変じ、

つぎへ



写真 16 26 ウ・27 オ

とへ何咎あつて此姥をば、手籠めにはなさるゝぞ。年は寄つても野良育ち。その手じやゆかぬ。またかいのう。南へ黙れ老いぼれめ。陳ずればとて許さんや。手向かひなすと命がないぞ。藤へ南兵衛殿、マア待たれよ。高の知れたる老女一人、立騒がずと、者共引け／＼。

「27ウ28オ」

つゞきこゝに隠れ住むといへり。しかるに、今これかれを目の当たり見る時は、その面影少しも似ず。親子とせんも証拠なし。かゝれば、重ねて千代童を責め問ふ他に術はあらず。詮議の役は鬼刀自・南兵衛、兩人に申付けん。喜怒哀樂を推し量るは、琴の調べに増すものなし。それ宮商角徴羽の五音には、心に思ふ事顕れ、悲しみあればその声憂ひ、喜びあれば調べ整ふ。幸ひなるかな、壁に寄せたる破れ琴こそ、究竟の責め道具。鬼刀自はその琴をとく調べよ」と、厳命に辞しても絶えて許されず、用意の衣裳を給はれば、是非なく着替ゆる晴小袖。琴押し直し掻き鳴らせば、義家重ねて、「いかに南兵衛、あれを見た

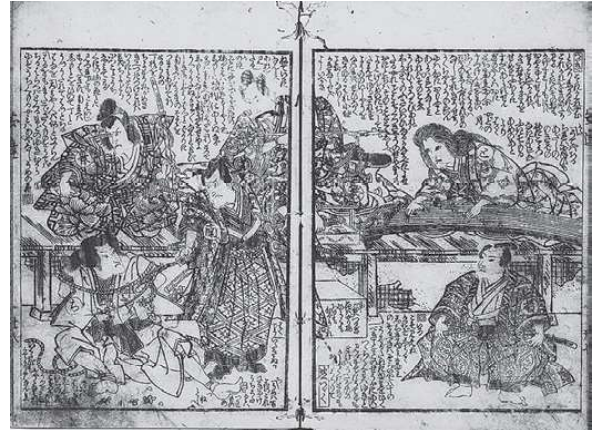


写真 17 27ウ・28オ

るか。軒端に匂ふ早咲きの梅が枝は、よき呵責の筈。南枝にあらぬ  
汝が名は南兵衛。あの一ト枝を折取つて、筈となして童子を責めよ。  
打つか打たぬか、サアく何と」ときびしき御錠。はつとばかりに  
南兵衛は、袴の稜をつまみ上げて、折取る梅の一ト枝を、千代童丸  
が目先へ突き付け、「これはいかに」と問ひかくれば、千代童莞爾と  
うち笑みて、「我が国の梅の花とは見つれども」と、詠じも果たさず  
南兵衛は、筈を引いて丁と打つ。打たれてはつと散る花を、へ大宮  
人は何と言ふらん。へ春をも待たで咲くものを、打てば散る払へば解  
くる窓の雪、心柄にぞうち曇る、闇はあやなし梅の花、色こそ見えね  
香にぞ知らる、白真弓、真弓の反るべきは反らいで、八十の姥がたれ  
に弓を引くべきと、琴の唱歌に合はしつゝ、落花は雪と見るまでに、  
打てども解けぬ疑ひの、呵責に時もおし移りて、  
うたへ打てば散る散れば匂ひも化野の、軒端の梅に心なき、嵐な  
吹きそ漏る雨の、あとより晴る、宿の月々。  
南へ心は剣、花は檜梅、開くも散るも心柄。これでも白状いたさぬ  
か。  
ちへ梅は百花のこれ魁。打ち打たる、は兵の、常としいへば恥な  
らず。死しての後の名こそ惜しけれ。打つを和主が役ならば、  
幾度も打て、かり戸南兵衛。

次へつゞく

## 「28ウ29オ」

つゞき 調べ果てたる琴の音に、義家左右を見返りて、「南兵衛退け、詮議は済んだ。鬼刀自には咎はなし。此上は千代童に説き進めて帰伏させよ。我は奥にて休息せん。皆々参れ」と座を立ち給へば、包季・景政、御跡に引添ふてこそ入りにけれ。跡見送つて南兵衛は、かねてぞ磨く心の刃、千代童が縄切り解けば、三人顔を見合はして、「宗任殿、衣手殿、この千代童も幸ひに、こゝまで引かれて来つる事、再び得がたき天の助け。シテ義家を討つて取る手立てばし候か」と問へば、衣手うち領き、「かねて一味の野伏・山立、こゝかしこに隠し置けば、合図に従ひ馳せ集まる、狼煙の用意はその火鉢」と言へ

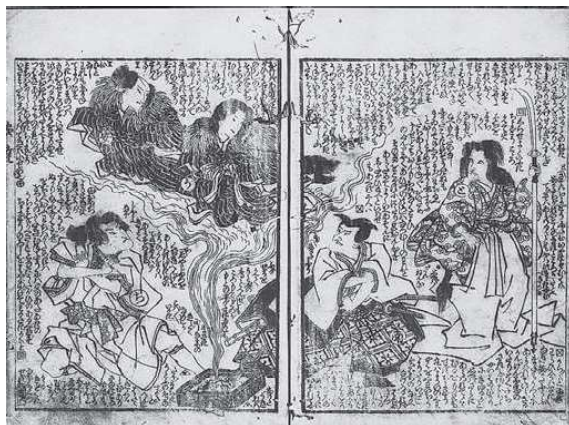


写真 18 28ウ・29オ

ば宗任さし寄つて、「合図の用意よしといへども、五人三人の野伏をもつて、武勇に長けたる義家主従、討ち取らん事心許なし。我も亦かねてより、密かに一味の兵を勢子の如く出立たせ、此黒塚の八方を取り囲ませ置きたれば、たとへ義家翼ありとも、逃れ出べき道はなし」と言ふに、千代童勇み立ち、「しからば敵は小勢也。祖父頼時、父貞任が恨みを返すは瞬く内。ぬかり給ふな母御前、伯父人。」おふ、妾が為には夫の敵「宗任には父の仇。兄の恨みを返さん事、何疑がひのあるべきぞ。千代童狼煙をはや上げて、味方にかくと知らせよ」と言ふに千代童心得て、火鉢を間近くおし直せば、「ノウ待ち給へ、勿体なし。安方こゝに候ぞ」「うきねも参りて候なり。まづ待ち給へ」と押し止めて、夫婦が姿立ち現れ、「かねてお諫め申せども、御用ひなく今宵の軍略。合図の狼煙は夏虫の、我とその身を焦がすに似たり。只御心を改めて、義家朝臣に従ひ給へ」と言はせもあへず、三人はからくと嘲笑ひ、「今は世になき安方夫婦、またも現に現れて、いらざる諫言不忠の至り。とく立ち去れと切払ふ、刃の光に消ゆるかと、思へばさらに現れて、止むるを物ともせず、千代童丸は用意の火薬を懷中より取り出し、火鉢の中へ投げ入るれば、はつと立つたる煙と共に、馥郁として異香薫る、香りは正しく錦木の名香に恐れてや、安方・うきねは忽ちに善知鳥の鳥の姿と変じ、羽撃き苦しむありさまに、衣手も又茫然と、しばし酔へるが如く也。宗任はかゝる奇特になほも屈せずつゞきへ」とへさては千代童一心、親に背くは安方が靈魂のなすところか。



たとへ手立ては顕るゝとも、やは此まゝに止むべきか。思へば  
 残念な。

南へ安方夫婦が生を變へて善知鳥の鳥と變ぜしも、衣手殿がもとの姿になりしも、正に錦木の奇特なりしか。こはくいかに。

ちへ邪術を挫き變化を現す、げに名香の香りは靦面。ハテ争はれぬ奇特じやよなア。

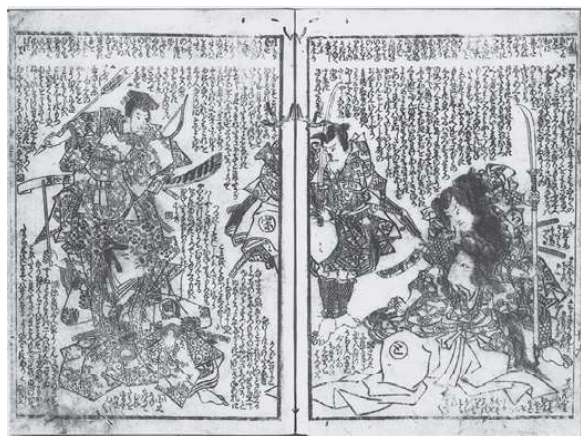


写真 19 29 ウ・30 オ

「29ウ30オ」

つゞききつと見て、「心得がたし、安方・うきねが幽魂、善知鳥に變ぜしは」と言ふに、夫婦はさめぐとうち嘆きつ、立ち上がり、「味

気なや、忠義の為に身を殺し、なほ諫めても稲舟のいなとばかりに水鳥の、うきね儂く名にし負ふ、善知鳥次郎が安からぬ、冥途の苦患畜生道、此家に蓄へ納めたる、善知鳥の血潮に染着し、紅蓮の波の夜となく、昼共分かぬ血の涙、世に亡き玉を呼子よ、覚束なくも安方が、忠義も水の哀れげに、稀なる香の煙には、立寄る事も奈落の底、落ちて苦しき執着を、晴らさせ給へ人ぐよ。三世の縁もこれ限り。もとの古巢へ帰らん」と、言ひては見返り立返り、さすが名残は鴛鴦の、劍羽ならぬ善知鳥の涙、雨と降らして妄執の、雲井遙かに失せにけり。時に醒めたる衣手の刀自は、すつくと身を起こせば、いと白かりし九十九髪、黒髪山と變じつゝ、もとの姿となりしかば、宗任ますく驚きて、「奇なるかな兄嫁御、香の香りに悶絶し、白髪變じて又もとの黒髪になつたるは、察する所、狼煙の火薬に錦木の名香を交へ焚きしと覚えたり。さては千代童二心、親に背き伯父を欺き、仇に組せし人非人、言訳ありや」と左右より、詰め寄すれどもちつとも騒がず、「この千代童は、和主たちの子にあらず甥にあらず。かくのみ言はゞ不審に思はん。故人鎮守府の住人兼丈兵衛直方夫婦は我がまことの親にして、又かの直方に養はれ、包季に去られたる袖萩こそ、これ貞任が娘なれ。直方その初め、貞任が謀反を諫めかね、滅亡の後、その子孫の絶えん事を嘆き、同じ日に生まれたる我が子と、貞任が娘を人知れず取り換へたり。よりにて我は貞任が一子となり、袖萩は又直方が娘にはなりたれども、これを知る人なかりしに、袖萩が守袋なる臍の緒に書き付けありしかば、包季悟つて袖萩を離別し、

直方も亦御主君の御勘気を蒙りにき。我も初めはこれを知らず、勿体なくも義家朝臣を敵と狙ひ奉りし、先非を悔ひてかくの如く」と、告ぐるに驚く宗任・衣手。「さては汝は取り換へ子にて、我が子にてはなかりしか。恨みは尽きぬ。軍神の血祭に首打ち放さん、覚悟をせよ」と、長押に掛けたる長刀取り延べ切らんとすれば、はつしと飛び来る三羽の征矢、衣手の刀自が肩先へ一ト鏢打つてすつくと立つを、「さしつたり」と抜き取り見て、矢柄に付けし黄金の札に「源義家これを放つ」と記せしは、鶴に寄へし赦免状。「汚らはしや」と投げ捨て、宗任諸共刃を引さげ、打ち向かはんとする程に、合図によつて馳せ来る者は、宗任・刀自らが味方であらで、源氏の軍兵雲霞の如く、「逃さぬ、やらぬ」と取り巻けば、二人は案に相違して、切り抜けんに進む所に、一ト間の内より御声高く、「貞任が妻衣手の刀自、安部の宗任らしばし待て。八幡太郎義家こゝにあり」と

つぎへ

ちへ娘方から敵役、又荒事の千代の戸、千代童。何と肝が潰れようがの。

とへ因果廻りて娘と孫を、殺して今ぞ身を殺す。罪も恨みもこれまでく。

へ国妙うけ給はりて宗任を許す。めでたしく。

「30ウ」

つぎ名乗りかけ、包季・景政兩人に隔ての襖を開かせて、弓矢携へ立ち出給ひ、「愚か也兩人、さまぐに手立てを変えて義家を狙ふとも、朝敵謀反の輩には、天も助けず神も守らず。衣手が宮城野にて殺したる盲女は、直方が養女にしてまことは刀自が娘なり。胎内の子はこれ孫なり。疑はしくは、袖萩が髑髏はすなはちこゝにあり。血潮を染めて疑念を晴らせ」と仰に包季立寄つて、妻の髑髏へ衣手が血潮を注げば、染め着きて漆と膠に異ならず。かゝる証拠に、衣手の刀自は後悔慙愧して、自害してこそ失せにけれ。宗任も襟おし寛げ、すでに腹を切らんとするを、景政・包季武勇を惜しみ降参を勧めしかば、つひに心を改めて、義家に従ひ奉り、後に筑紫へ赴きけり。千代童は儼丈太郎直高と名を改め、飯にも親子の因みあれば、衣手の刀自が亡骸を乞ひ受けてこれを葬り、又包季・宗任と心を合はせ、直方・袖萩・安方・うきねが追善の仏事を修行したりしかば、幽魂各々得脱せり。栄え久しき義家朝臣の、武徳の程こそめでたけれ。



写真 20 30ウ

景政<sup>かげ</sup>へもはや敵<sup>かな</sup>はぬ安部<sup>あべ</sup>の宗任<sup>むねたう</sup>。さすがの名家<sup>（めいか）</sup>、子孫<sup>こそん</sup>が絶えん。  
心を改め降参<sup>あらたかうさん</sup>せよ。

歌川豊国画印 曲亭馬琴作印

彫工 朝倉吉次郎 傭筆 藍庭晋米

〔付記〕

資料の掲載を許可していただいた、東京都立中央図書館・早稲田大学図書館に深謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費（若手研究 課題番号：18K12301）における成果の一部である。



**Abstract***Adachigahara-Akino-Nishikigi:*  
Transliteration (Part II)

Kazunori NAKAO

A continuation of my previous study in *Memoirs of Nara University No.51*, this paper is a transliteration of *Adachigahara-Akino-Nishikigi*, first published in 1820, with brief commentary added. The whole story of this work is based on Joruri's work *Oshu-Adachigahara*. Among them, in the scene where “Hitotsuya” corresponding to *Yondanme-Kiri* (the end of the fourth act), the “adsorption-type” *Chiawase* (blood matching) that determines the parent-child relationship by pouring blood on the skull is incorporated. Prior to this, Bakin had actively used the “fusion-type”, in which the blood of a parent and child mixes. However, after discovering “adsorption-type” from Chinese historical documents, this one came to be used preferentially. For details, please refer to my manuscript "Reconsidering *Chiawase*: On the works by Kyoden and Bakin" (*New Yomihon Reserch* Vol.13, 2022).

**Keywords:** Kyokutei Bakin (1767-1848), *Gokan* (one type of illustrated novel), drama, *Chiawase* (blood matching), *Hitotsuya* (common name for the end of the fourth act of *Oshu-Adachigahara*)